

## 岩手大槌町 ボランティアツアー報告

11期 青柳 健二

地震・台風そして豪雨。日本とは、自然の猛威とともに生きていく場所なのだろう。今年は特に、地球そのものが日本を基点に大暴れしている感があります。いや46億年を超える地球の歴史の中ではほんの些細な出来事であり、自然が暴れる日本は、だからこそ豊かな自然が残り、多彩な動物達が暮らすホットスポットなのでしょう。

3.11 東北地方太平洋沖大地震からすでに4ヶ月が経っていますが、震災ボランティアツアーに参加しましたので、その様子を、少し真面目に報告します。参加したボランティアツアーは、岩手県北観光が主催したバスツアーで、7月22日夜東京発、23、24日と岩手県大槌町でボランティア活動、25日帰京という日程、宿泊は遠野市の遠野ふるさと村でした。(南部曲り家に宿泊)

ツアーの参加者は40人。男20人、女20人とピッタリ同数なのにはビックリ。女性が多いこと、若い人が多かったことには、その意識の高さと行動力に感心しました。若い夫婦参加者が3組、青年となった男の子をつれた中年夫婦が1組、さらに13歳の男の子をつれた親父さんもいました。九州のソフト会社が新入社員を4名派遣していました。二人連れ程度での参加が多かったようですが、私同様一人参加も結構いました。そして付言すれば、63歳の私が最高齢でした。

作業は、津波で破壊された住宅のがれき整理でした。解体処理され重機で整地された後を、手作業でガラスや陶器片、家具や生活用品などの破片を集め、スコップで土嚢袋に入れていく、そんな作業でした。時間は10時~12時、13時~15時の活動でした。40人2班に分け、手分けしての作業で、作業自体はそれ程厳しいものではありませんでしたが、直射日光の当たる中で、使いなれないスコップを使うなど、チョット大変ではありましたね。おかげで持病の腰痛が悪化して、いまだに傷みを引きずっています。作業した場所が、あの津波で甚大な被害を受けた大槌町の、正に被災地

中心部である安渡地区であった事で、この津波の凄まじさを身近に感じる事が出来たのが一番の収穫でした。港から300m位の場所で、眼に入る範囲の全てが大津波によって破壊されていました。三陸鉄道山田線の鉄橋は、無残に破壊され、線路は何処かに流されていましたし、津波から街を守るために造られた高さ6m近い堤防も、軽々と乗り越えられ、寸断されていました。それらの悲惨極まる状況を、お昼の休憩時間に、この眼に焼き付けることができたのでした。

大槌町は、人口が1万5千人強の街ですが、市街地の半分が浸水し、人口の1割を超える1,700人弱が死亡・行方不明となるという破滅的被害を受けた町です。地震発生から4ヶ月が過ぎ、大津波に浸われた家や建物は、ガレキとして処理され、海辺に山となって集められていました。全てが土台だけ残して更地化された様は、嘗々と築いてきた人々の生活そのものが、見事なまでに、海の水によって洗い流されてしまったことを表していました。M9という大地震と、それが引き起こした千年に一度という大津波の凄まじい破壊力をこの眼で見て、人間の小ささ、無力さを実感させられました。

ボランティアツアーには、5回目の参加です、3回目ですという方々が何人もおられました。土日ということもあり、沢山のバスがボランティアを運び、多くの人々がボランティアに参加している様を見ることが出来ました。一人では小さな力であっても、多くの力が集れば、大きな力となって事を前に進めることが出来るということも、確認できたことでした。

宮古市に住み、仕事場が津波に流され、職を失い、今はボランティアツアーの添乗員として熱く働く若者が、バスの中で次のように訴えていました。

「被災地の現状を知って欲しい。意識を持って支援して欲しい。そして支援を継続し、支援の輪を広げて欲しい。そうすれば、希望を持って復興に向け、動いていく事ができるだろう。」

宿泊した遠野市は、大槌町の隣の釜石から1時間ほど内陸に入った山里です。柳田

國男の遠野物語で知られますが、百名山早池峰山の麓にあると言えば、山好きには通るかな。ここの遠野ふるさと村に泊まれるのが、今回のツアーの魅力でもありました。ここには、江戸末期から明治中期に建てられた曲り家が6棟保存されており、その2棟に男女分かれて泊まりました。ふるさと村は、文化と伝統を保存し体感できる施設として造られたものですが、敷地内には川が流れ、田や畑が作られ、実際に馬が住んでいる曲り家もありました。この種の施設としては大変良く出来ていて、「龍馬伝」などテレビ・映画の撮影にも数多く使われています。ハスの花が咲く池では、ホテルが輪舞するさまを久しぶりに観察することも出来たのでした。

ツアーでは、この施設のビジターセンター内にある食堂で食事をし、曲り家の囲炉裏端で酒を飲みながら語り合うなど、ある種ワングル的な盛り上がりのある楽しいものでした。ツアー参加3回目の、静岡から来た62歳のオッサンが仕切った夜の部では、全員がツアーに参加した動機や、現地を観て活動をしての感想を語り合い、時に涙する輩も出るなど、他のバスツアーでは味わえない体験もありました。また、最後の日には80歳になる地元の語り部が、曲り家の炉辺で「遠野昔話」を語ってくれました。方言で聞き取れないところもあったものの、「艶笑小話」みたいで愉快でしたね。

ボランティア初日の23日、13時34分に宮城沖を震源にするM6クラスの地震がありました。休憩時間で休んでいる時でしたが、グアーという大地が唸るような音がした後、強い上下動がありました。津波もありうる、とのことで近くの墓地の斜面を登って高台に避難しました。少しして、「津波の心配はありません」との報を聴き、ホットしたのですが、チョット緊張しましたね。翌日の午前3時頃にも余震がありました。曲り家の中で寝ていたのですが、木の雨戸がギシギシと震えました。誰も起き上がって逃げ出す人はいませんでしたが、皆が布団の中で体を固くしていたようです。

ボランティアとしては、宅地のがれき整理をしたのですが、余震で作業を早めに切上げたこともあり、100坪程度の場所なが

ら最後まで終わるには至りませんでした。9割程度は完了したということでしょうか？40人でこの程度、正直、ボランティアに来て、役に立てたのだろうか？

今では、ボランティアに求められる役割は変わってきているのでしょうか。浸水した民家の泥出しなど、生活を直に回復させる仕事は殆ど終わっています。GW初めに、同じ大槌町で活動した人は、「良くここまでガレキを整理したものだ」と感嘆していましたが、住めなくなった家は破壊し、ガレキとして集めるという部分までは、この大槌町ではほぼ終わっていると感じました。勿論、集められたガレキをコンクリート・金属・木など可燃物に仕分けし、本当に処理することまでは進んでいません。また、同じように壊滅的被害を受けた陸前高田市は、未だにガレキが散乱している部分が残っているとの事ではあります。大槌町に来たボランティアの別のグループは、ガレキで汚された大槌川を整理して、菜の花で黄色に染めようとの「菜の花プロジェクト＝河原の草刈」が活動であったとのこと。それは、希望に灯をともし活動ではありますが、生活を直に復旧させるためのボランティアとは違うものになっていましょう。

大津波に流された鉄橋の先から、生活の場の全てを破壊つくされた街の姿を俯瞰して、これをどう復興させたいのだろうか？と絶望的になったものですが、今こそ、行政や政治がその機能を発揮すべき時であると、心底思います。そして、その頼るべき行政や政治が、あまりに不安定である、この現実に、忸怩たる思いにいたるのが、本当に情けなく、寂しく思います。大槌町は、町長が津波にのまれ亡くなりました。来月の8月28日に、やっと町長選挙を行なうところまで漕ぎ着けました。この選挙が終わり、本当の復興へのスタートを切ることになるのでしょうか。その時には、今の総理は退陣し、この復興を後押しする新しい体制が築かれているか、はたまた、政局がさらに拡大し破裂して、解散総選挙などという事態になっているのだろうか。前向きにボランティアに取り組み、汗を流す若い世代に、希望の芽を見ました。それとともに、我々団塊の世代など大人たちは、人々

を守るために一体何をしてきたのだろうか？

未曾有の大地震・大津波とは言え、一面これは人災であるとも言えます。大槌町では、高さ6mを越える大堤防を築きましたが、その堤防を過信してか、堤防の奥に多数の家が建てられ、そこに住む人達は、多くの人が逃げ遅れて亡くなったのでした。堤防は川に沿って「八の字」に造られたため、津波はかえって勢いを増し、その堤防を易々と乗り越えた後は10mを優に超え、鉄橋をもなぎ倒すまでに増幅して町の殆どを呑みこんだのでした。鉄橋の少し先にあった町役場では、津波が襲うその直前まで防災対策会議が行なわれており、屋上に避難できた一部の人を除いて、町長をはじめ多くの職員が津波に流されるという悲劇を生んだのでした。

三陸沿岸は、津波の常襲地帯であることは良く知られています。安政・明治・昭和と各時代に三陸大津波と言われる津波に襲われています。そして我々の知るチリ地震大津波は、わずか50年前の出来事でした。我々は、この歴史に何を学んできたのでしょうか？

今日は、埼玉県知事選挙でした。私も、すでに投票を済ませましたが、午後8時過ぎに開票が始まった、まさにその時、現職知事の当選確定が発表されたのでした。出口調査のなせる技。私の一票は実に軽く、殆ど結果に影響を残すことはありません。国政選挙も同じですね。3年前に中国の四川省で9万人の死者・行方不明者が出る大地震が発生していますが、被災した町を別の場所に丸ごと移すなどの復興作業は殆ど完了したと聞いています。民主主義が、優れた政治制度であるか疑問にも思えてしまいます。

ただ、先日中国の高速鉄道事故を見ると、日本の方がまだましでしょうか？とも思いますし。でも、福島第一原発の現状を見ると、やっぱり今の日本はおかしい！とまた思いますね。

「当たり前前に思っていて、毎日普通に過ごしていた生活が、一瞬にして破壊され、奪われるという事実にあい、こんなに恐ろしいことはなかった。」

「避難所となった学校の駐車場で家族と再会できた時は、心から、ああ良かったと思った。」

「どうか、大切な人を大切にして、守ってやって下さい。」

今回のツアーの添乗員兼ボランティア隊長が、宮古市で被災した日のことを、涙ながらに熱く語った中での言葉です。ボランティアは、被災地に希望と元気を与える役割に変わってきていると思いますが、それを必要とする方々が、まだまだ一杯いるのです。今生かされていることを大切にして、自分に出来ることを、地道に誠実にこなしていく、そんな日々の積み重ねも大事にしていきたいものです。そして、地球は生きています。我々の住むこの場所で、未曾有の大地震がいつ起こっても不思議ではないのです。経験を活かし備えることも、また心掛けないといけないことなのです。



大槌町港町地区

